

の爲めである、最善美は蔽はれざる程に發揮され、毫も流行の必要がない、餘り化粧美に憧憬する時は自然に遠かりて體美の境界を脱出し終には身體をも害するに至る例へば婦人美の凡ての特長中最も重大なるものは西洋婦人の *Schlanke mite (Schmerzhals)* 溢れたる胸體なり、コルセットを用ひる事の有害なる事は已にヒポクラテス時代より識者の唱導せし處なるも終に何等の効なかりし故に近時の學者は到底地球の存在せる間はコルセットを廢する事は至難たる事を悟つた、而て近來は不得止として亂用を警めるのに止める様になつた、コルセットを廢する事は尙多くの時を要すと嗟嘆して居る、恰も日本婦人の帶と紐とで緊縛するのに該當して居る、甚きは數十條の紐と板の如き帶とで上部胸までをも堅く緊めて食も通らず呼吸も絶え／＼に苦めるのを見る事がある、特に身長短い者は帶を愈、高くして、恰も脊の低い男子がチヨツキを短くして體の中心を釣上げ、下半を長く見えるやうに工夫

する如く、しめるから餘計に苦しい、ジャバ人は決して紐を用ひない故に腹の恰好は一番良い、胸下部を壓迫すると胆石症、遊走腎、狹窄肝、胃下垂症、蒼黃貧血症、秘結、肺、心臟疾患を起し易い、借問す、健康と生活の樂みとを犠牲にしてまでも美にしなければならぬ、而もそれで眞の美の目的を達し得るものと思ふのか、答は簡單である、曰く「外見に良く、實際には悪い」。

自由なる運動によつて胸體を伸張する事は體格美を増進する著きものである、胸廓は強く膨隆し乳房は高く登りて豐滿に、下腹は下坦に腰部は寛濶に、皮膚は緊張し、少々の缺點あるも伸張によりて補はるゝものである、適度に行き動く時は筋肉は愈、強く皮膚は益、滑澤強靱となる、走る時は男は頭を俯けると力が出で、女は仰むくと力が出る、坐位は凡て美をなさず、西洋の美人の資格として脚の長きを缺くべからざるものとし、立位、歩行時の美を説き動的美人を標準として居る、日本は舊

來の風習で殆ど靜的美人のみである。坐位を基とする干係上より自然と短脚又は曲脚に陥りて坐位ならずんば美をなさざるが爲ならん坐位の場合と雖も上體を伸張するほど美を増すものである。日本婦人の一般が羞耻の姿勢であると言はれて居る、後方から見ても真直でありたい、幼年期の疾病、過勞、不適當の生活等にもよりて曲り、猫脊、丸脊となりたるは、胸廓も後方に屈するが爲めに前胸部は扁平になり甚だ宜くない、猫脊は筋肉の發育不良、遺傳等にも基くけれども大體は意志薄弱が主因であると主張する人が多い、空氣と日光と營養の缺乏せる都市の勞働階級には猫で脚の短曲なのが多い。

女兒は一般に男兒よりも早熟す。(第一歳に形を整へ、第六歳に漸々長く細くなり始め、青春期には愈、細長くなる)故に女學生時代は最も蛋白質に富む滋養分の豊富なる供給の必要時期である、一般に食物は量と質との關係を考へ、滋養價多く消化勞力少きものを攝らねばならぬ、

蛋白質は身體各器關組織を平等に養へども、特に筋肉を強健に、皮膚を滑澤に、脂肪を適度にするの効能著きものがある、反之、芋類、パン、穀類等を主食とするときは筋肉は薄弱に、皮膚は粗糙に、脂肪は餘りに過剩になつて下腹膨大す、即ち植物質營養は身體容積を増す事は六なれども、體の持久力及内容の強大は到底肉食者の比ではない、女子の最も苦勞とする脂肪が過少か又は過大となる、即ち瘦せ過ぎるか、又は肥え過ぎる、體に圓るみを付ける脂肪が減じて瘦せれば勿ち體が角張つて來る、肥胖は身體中殊に腰部及上脚の上三分の一に著明に脂肪が沈着するから横太りになる、茲に於て營養の正當なる度合を知るには重量に如くはない、容積過大にて量輕きは感心しない、時々體重を衡りて次の方式を參考とし、運動、食物、休養等によりて反省調節するの要がある。

$$\frac{L \cdot B}{240} = K$$

$L =$ 身長
 $B =$ 胸幅 (乳高)
 $K =$ 體重基

近時世上に安價生活の聲高けれども宜く其真意義を誤解せざらん事を望む。從來唱ふる生活の三要件の如きも其輕重より論すれば、食、住、衣の順にして衣を第一として苦勞するは教育なき女子の事とす。

皮膚血色の美醜は同時に健康の表兆である。婦人美を發揮さるゝも阻止さるゝも成年期の注意如何に據る。美しき花を咲かせん爲めには肉體の健康に努めなければならぬ。營養悪きか疾病あれば皮膚は滑澤を失ひ萎靡混濁粗鬆となる醜！何ぞ夫れ若き婦人の心配、苦痛、涙、不眠の種なるよ。皮膚は攝養を必要とし勉めざるべからず。粉飾は寧ろ排すべきである。洗粉紅白粉を用ひるのみにて美麗になると思ふは誤解の甚いものである。新鮮なる空氣、日光、十分なる睡眠、活きたる血によりて、内部よりの磨きをかけねば本當でない。皮膚の色は記載する事は表すよりも困難なりとせらる。畫家は白、コバルト、黄、ワツケル、ヅルミロン等を用ひ、詩人は薔薇花、百合花、臘と雪、初生羊兒、象牙、大理石、ビロード、石

膏等と比較形容し、一般には牛乳と血の如き麗き皮膚といふ白きが中に鮮かな血色あるを欣ぶ、されど是は白哲人の事なり、吾等は黄色人種なれば、餘りに白きを要求するは不自然な事である。特に顔貌其他露出せる部分は寒冷、光線其他の作用のために幾分強く着色するのは當然である。勢ひ戶外に活動する者の顔は赫く閉居する者は蒼くなる。頬は動脈に富むのと皮膚が最も軟かきために、高度に著く赤きを常とす。但し他部分が貧血蒼白たるも頬のみ尙永く著く赤きは往々病的の事ありて、頬のみ赤きに油斷すなといふ俚諺がある。日本婦人の白きは往々蒼黄の病的に傾き易く、黄蒼は疾病色にして、白きが中に紅き輝きを有せざれば健康色とはいへない。再言すれば多量の善き水と善き石鹼が潔く麗しくし、新鮮なる滋養、空氣、日光、十分なる運動と睡眠が光りと輝きを齊うすものである。

揚貴妃

李白

天生麗質難自棄

一朝選在君王側

回頭一笑百媚生

六宮粉黛無顏色

二、賢母良妻論 身體發育完成と性慾發動とは大に期を異にす、性慾の發生は男子が女子よりも遙かに早く、己に十二―三歳乃至十六―七歳にて旺盛に勃興するもの少からず、女子は概して遅く、稀には三十歳に至て始めて發生せるものあり、社會經濟の趨勢の然らしむる處と、一面には二十五歳に至つて自體成熟するを以て、その以前のは有害な影響を及すものなるを顧慮して、歐米各國何れの男子結婚平均年齢を見ても概ね二十五歳以後である、男子の結婚に最も適當な年齢は二十五以上二十八乃至三十歳とせられて居る、女は十八に成熟するけれども、完成は二十歳である、男子よりは早く發達し、早く發達が止る、故に二十歳前の結婚は體を弱める、若い内の獨身には誰も後悔せしものなしといふ諺もある、結婚男女の年齢の差は八―十歳の差あるを可とし、己に

十五歳以上も異ふのは亦有害とせらる、男は初老から乾萎^みるけれども、女は男よりも急に老け易く、妊産を経過するほどより早い佛國の死亡率を見たと若い内は未婚者の死が少く、老年になると反對に已婚者の死が少い。

男十四―二十歳の千人中の死亡率

已婚 二九,三〇〇 未婚 六,七〇〇

女

年 齡	一五―二〇	二〇―二五	三〇―四〇	四〇―五〇	五〇―六〇	六〇―七〇
千人の未婚者死亡率	八〇	八五	一〇三	一三八	二三五	四九八
千人 已婚	二四,〇	九八	九一	一〇〇	一六三	三五四

女の受胎に、即ち母となるに最も適當せるは二十乃至四十歳である、此の前後は母體を害し易きのみでなく、兒にも宜くない、各兒の間隔二ヶ年半を度とし、婦人の一生に八回の産を以て適度の最高度とす、妊娠

期間が九ヶ月、授乳期が九ヶ月乃至一ヶ年、例令自ら哺乳せずして乳母人工哺乳にするも尙ほ六―九ヶ月を経過せずんば母體の健康は十分回復せざるものである、病氣か體薄弱なるときは一層の長期を要する事は勿論である。

三、結婚論 女子の最大本能は母となる事である、女子の母となるは人生の最大幸福にして且つ最終の目的である、人は結婚するを目的とすといふ事が殆ど原則と認められて居る、然れば結婚に際しては、道徳上經濟上のみの調査研究に信賴したり、從來の因襲的禮式のみを囚はれて安心すべきでない、是非とも相互の健康證明書を交換する事を必要としなければならぬ、健康關係は頗る重大關係を有し、大體に次の三様の意味に影響を及す。

- 一 生産勞働の能力を減じ社會的位置に關係す
- 二 夫婦共働生活を阻害す、家庭、食卓、寢臺以外に精神的領域にも及

ぶ

三 子孫の心身に悪影響を及ぼす

以上の内主として茲に警告せんと欲するのは第三に就てある、遺傳は男の方が女の方よりも影響は大である、遺傳疾病とは、精神、神経病、心臟、惡性腫瘍、腦出血、肥滿症、胃弱、糖尿病、近視等である、最も恐るべきは花柳病と結核とす、一、勞働能力、生命を奪ひ、二、周圍に傳染の危険を及ぼし、三、遺傳の憂あるが爲めである。「開化は梅毒化なり」といふ、世の開化と共に花柳病の蔓延力は益々猛烈を極め、大都會となるほど愈々甚しい佛リコード氏は男千人中八百人は罹患せりといふ、昔風俗の亂れた時代、上は羅馬法皇の如き尊貴の人に至るまで、花柳病に罹らぬものはなかつたといふ程である、假令嚴肅を以て聞えた家庭と雖も意外な遺傳を有することもある、一旦治癒するも三―四年は尙危険あり、二代―三代を通して遺傳する事もあるといふ、曾て一度花柳病に罹つた男子は例

外を除きて殆ど感染せしめて不妊とする。されば婦人病の八〇、九〇%
不妊の五〇%以上は花柳病の感染に基き、不妊の過半数は月経痛者と
なり、月経痛者の七〇%以上は不妊となる。一般に慢性の婦人病は不愉
快、苦痛の源泉となり、人生を甚だしく苦味にするものである。反對に幸
福なる子孫を得る時は、男子は希望(後繼者を得る)の満足によりて一層
活潑になり、婦人は母たる本能を満足するの機會を得て、假令多少桎梏の
不満を感じながらも豊富なる愉快の永久の源泉となるものである。

近親結婚は漸次に精神的方面次で身體的にも變性を惹起するもの
である。避くるを安全とす、之が理由は簡單である。完全無缺なるものは
一人もなし、即ち異族婚すれば相互の缺點と長所とが相融合せられ宜
きを享るけれども、同系族婚は同様の缺點、同様の長所が兩々により高
度に濃厚になつて現れ不慮の結果を齎らす事がある。

雜 問

血 の 話

吾人の脈管に漲る血は永き歴史を有す。帝國の歴史と共に世界特
殊のもので、萬世一系天下無二皇統連綿の下に傳はり、其間外國の血を
混することを決して許さない。夫は國家の誇りである。國民の誇りで
ある。而も歴史は幾度か變遷す、吾人の血管には此歴史を語る血汐が
流れてゐる。

太古草昧に遡つて熟ら研究すれば、日本人は決して一人種より成つ
て居るものではない、少くも十種以上の民族の集合である。併し恰も
鑛山より鑛を探り來つて純金を製するが如くに、此各種民族の中より
長所美點を拔萃した各民族の血が、山紫水明なる日本の天然によりて
美化せられ純化せられて芳烈無比所謂日本民族なるものが形成せら

れたのである。斯くして吾が國民の血は、自ら一種の先天的特質を發揮し、唯様々に咲き匂へる花に、色々の差あるのみにて、何れか純ならざるべき。嗚呼此の血、吾人の脈管に枯渴せざる限り、國家は永久に、民族は無限に展びん哉

一、血の思想 建國の初めには民尙武の氣に富み、刀鎗を野邊の白茅ほどに思ひ倣し、血潮滴る生首を見ること西瓜の如く、女までも人の血汐を唇に塗りて、化粧せしなどのあらくれたる状態なりしも、今や驚くべし、世は進化して髯ある者も白粉つけて姿に氣を揉む世とはなりけれ、世は平にして佩劍久しく血に渴き、彈丸も不便や生の味の味を知らず。古來詩人の筆多く血字を見る、血は悲壯を意味し、又義烈を意味す、血は實に男性的にして詩的なり。佛語の文法血の字は男性にして、涙の字は佛、獨語共に女性なり。涙も亦詩的なりと雖も、而も涙と血と比較せんか、涙は實に女性なり、涙には時として假偽あり、假裝の涙、偽造の涙

なしとせず、城を傾け庫の屋根を漏らす傾城の涙の如き是なり。然れども血涙に至りては眞に男性的なり。君臣父子兄弟朋友能く他をして身命を擲たしむべし。血涙の流露する處敵なく、血涙は男子の生命なり、社會の生命なり。報國丹心嗟獨力、數行紅淚兩行字。

國亂れて忠臣現る。

身負創痕口含藥 宗社已亡我事止 一飛唯應君恩報

十有六人心肝鐵 遙拜鶴城淚潛々

心事何ぞ夫れ悲惨なる、正に是れ、英魂不返千秋恨、漠々青苔碧血腥。男子交、相盟ふ常に血を以てす、支那然り、日本然り、桃花の紅を燃ゆるが如き處、英雄相會し血を啜りて義を結ぶ何ぞ其詩的なる。四十七義士彼の一卷の盟書を染めし、淋漓たる紅血の血判は永く芳薫を竹帛に垂る、男子快心の業ならずとせず。

血判

是豈男子らしき行爲に非ずや氣節ある武士の標本たる彼の生涯僅に二十三歳、木村重成の冬陣、靖和に於ける誓紙の取替に秀頼の使者として本軍の茶臼山本營におきて家康と應接せし事は彼が一代の花とすべきなり、彼は家康の誓紙の判を血痕薄しとて再署せしめたり。大阪城を出でし好箇の青年武士は茶臼山の敵營に入り、斜めに把刀を執りて先づ自ら血判し、徐ろに老雄に迫るのとき、微風動かす肅然として一坐皆堅睡を嚙む。吁血は常に真正なり、絶対に真正なり。

追北歸來血洗刀、白日不動蒼天高。

嗚呼血に刀を洗ふ、何ぞ其戰の壯烈にして其境の悲惨なる白日不動蒼天高、何ぞ將軍の偉大なる。思ふ將軍の默然として屹立せる處、餘血刀より滴たり、四邊の流血杵を漂はすべし、正に是れ一幅慘絶壯絶の圖。十萬降兵夜流血、咸陽宮殿三月紅。

戰は血を流さずんば起らず、血を見ずんば戰止まず。腥風面を打ち

砲火目に眩し戰慄を禁せざらしむ、遼陽沙河の血、旅順、ハルビンの血、何ぞ其價の貴きや、知らず今將た何の状ぞ、血痕滴たる處、燦たる精彩を印し、黃白權勢、武器も其光輝を奪はる、血の威力向ふ處敵なけん。我軍十萬戰袍紅、悉是江南兒女血、これ元の將軍伯顔の詩なり、鐵血覆山山形改、これ乃木將軍爾靈山の詩の一節なり、國民の膏血凝ては護國の鬼と化す。

莫斯科の大宮殿は血に腥きロマノフ家の歴史を語り、アルサス、ローレンヌの地圖上には紅血滴る。絶世の美人高尾の貞烈は、舷頭の劍光一度閃めきて三叉の水爲めに紅なること幾許ぞ。宛轉たる楊妃の蛾眉は心なき雜兵の笑罵の裏に、馬嵬坡の草爲めに亂れて腥風今に於て餘恨あり。

蜀帝杜宇國亡びて餘怨あり、冤魂化して一鳥斜めに飛ぶ。しと、降る五月雨に八千八聲聲々に血に泣きて、滿山の杜鵑花皆赤し、花かあら

のか、家國蒼茫人世の興廢盛衰豈擧げて道ふに堪へんや。

二、血の迷信 血は最も清淨無垢の物と考へられ、宗教上の洗禮、酒洗懺悔の式には少兒或は動物を犠牲に供して血を流し、或は兄弟の盟を結ぶに互に血を以てするの風あり、或は疾病治療の用に供せん爲め、所謂吸血鬼の横行せし時代もありたりとぞ。今尙清き血を以て其罪を清められ得と信するの教徒少からず。

昔獨逸には血友と云ふものありけり、牧師が互ひの血を啜り、或は腕に傷けて血を混じて神前に捧げ、死生を共にするを盟ひ、若し一人死すれば他は殉死す、十八世紀半まで此風習續き、回々教及東西亞弗利加には今尙此風遺れりとか。

敵討(復讐)は古代にては凡ての國民に行れたる處、今猶東洋、アラビヤ、ペルセルン、カウカサス人族にあり。之が爲には全家族は、一門を擧げて血祭に供することあり、回々教典には身命金(Wergeld)とて法律規定

の下に金錢によりて解決するの風殘れり、現今獨逸にて行るゝ血闘の如きは、其遺風なるべきか。

三 血の俚諺

イ 血に交れば赤くなる。

支那豚仙の格言に曰く、天の道は白なり、地の道は白なり、人は中間に在つて赤しと。

ロ 血で血を洗ふ。

これ豈單に血族間のみの意ならんや、社交上造次も忘るべからざるなり。

ハ 血を含みて人に嘔く。

これ先づ我輩の汚穢さるゝを云ふなり、人の是非を言ふはこれ我が是非にして必ず身を傷ふの本なり、慎まざるべけんや。

ニ 畜生は血に迷ふ、人は慾に迷ふ。

ホ 血の筋は七代七代父祖の遺傳あり。
 ヘ 血は血だけ、血族は血族だけの事あり。
 ト 血の出る様な金。
 チ 石からは血の出る筈なし、人は木石ならざる限り温かき血と涙を有つ。 You Can not get blood out of a Stone.

リ 血は生命の基なり。
 ニ 田舎は活力と健康なる血液の源泉にして都會は罪惡と貧血の中心なり。

血は活動の源泉なり、古來氣血を以て生命の本となし、且萬病の本となすこと昔も今も異ならず。血は身體の營養を司る機關にして、一の社會を形成する多數の個人、即ち細胞の集合より組織せる一の有機社會をなし、外交も營めば戰闘もなす、一致共同の眞髓は茲に胚胎す。血は高潔なる感情の泉なり、勢力の源なり、熱の根元なり。熱は人生の意

氣にして熱なき人生は枯木冷灰、生なきに等し、熱ありて事業成り、國家興り、英雄生じ、偉人起る。熱なくんば靈火消えたる形骸たらんのみ。

血に冷血、温血の別あり。情と義とに背く者は冷血動物として擯斥す、梁の神經や銅線の如く血は冷きこと氷の如けん。歐洲の諺に

“Blut ist dicker als wasser.” 伊太利魯西亞にては “Blut ist nicht wasser.” “Blut ist nie so dunn, Is ist immer dicker als wasser.” “Blood is thicker than water.” “Blood is not water.” “Blood is never so thick, it is always thicker than water.”

生命、活氣、精靈、個性、精力、健康、智識等が特別のものとして血中に存在すとの感想は、古今東西其説を一にする處、若し夫れ武士道、大和魂の所在に就ては、吾人之を措て何處にか尋ねべきや。

涙の 話

一 初生兒と涙 人は涙を以て生れ、涙を以て葬らる。生れるや否や此の世の空氣を吸ふや否や、先づ第一に呱呱の聲を擧げて啼くのが人

の子の運命である。

温度と云ひ營養の供給、老廢物の排泄と云ひ、母の胎内は理想的の樂園である。一朝、外界に出るや色々の刺戟に曝され、痛い思ひをもしなければならぬ、而も生後、間もない孩兒は、憾むらくは、まだ十分に訴へるの表情器管を有たない。本來、初生兒の感情生活には、恐懼や、憂慮や、悅樂時は無くして、單に快と不快とがあるのみである、而も搖籃を天地とせる嬰兒には、自ら遊んで快を求め、不快を避ける能力を備へて居ない故に、不得止一種の表情を以て之を訴へる、即ち快く感ずる時は、眼瞼を大きく開いて、一層光輝ある明星の様な晴眼を睜はる、甘き乳に十分満腹した後とか、温き奇麗な襁褓に包まれて母の懷ろに抱かれた時に見るのが夫れである。反對に不快の際には、眼裂を狭くし、或は眼瞼を閉ち、更に啼き叫ぶ、此の際、初生兒は、落す涙を持たぬが、生後三ヶ月位からの孩兒は、眞珠のやうな涙を流し始める、微笑は、生後凡そ二ヶ月より、

笑は同じく三ヶ月から始める。人生の味ひ初めには、涙と笑がある。苦味と甘味とがある。

二、動物と涙　動物に涙無しと云ひ傳ふれど、悉達太子の愛馬は檀特山の別れに黄色の涙を流した、印度の象は屢、涕泣するといふ事である。分量の少きを雀の涙ほどといふ譬もある、犬は啼くとも涙なく、昔何事のありとも涙を流さずして、犬目の少將よと謠れたる人ありき、徳川氏の大奥(四代將軍家綱公時代?)夥しく狎を飼ひ體の小、胴の短、鼻の仰天すること、及び眼に涙をたふふるを以て名狎の四特徴とし、涙のある狎は頗る珍重愛玩されたといふ話もある。

「鳥と蟲とは泣けども涙落ちず、日蓮は泣かねとも涙ひまなし」

(諸法實相抄)

「強い名をもつ鬼百合なれど、雨にや涙をほろく」と(萬朝俚謠)

惻隱の情に乏しく、殘忍冷酷なるを涙の無い奴と呼ぶ、而も涙は涙器

より出て、人に涙器ある以上誰か血なかるべき、例令形は枯木の如く神經は銅線の如く心臓は鉛の如く血は氷の如く冷くとも、尙ほ息ある間は血もあり涙もあるべきである。心の灰の冷へ果てた墨染の世捨人も秋の夕の蟲の音には袖に露を濡らし、無情の蟲も此に感じて泣く、鬼の眼にも涙、石で刻んだ無心の地藏尊にも涙の譬もある、銅像が涙も滾した語草は西洋の昔噺には屢々見る。聖森（ひじりのも）といふ古蹟は羅馬第二代の國王ヌマーがエヂエリヤ女神と會合した處だといふ、王が崩御の後エヂリヤがあまりに泣き悲んだために身體が溶けて涙となつて了つた、後世未だに其涙が幾千年來續いて出るといひ傳ふ。

三、涙器 涙器は眼球の上外方に隠れ、涙腺、涙囊、涙湖、淚阜、淚點、鼻淚管等より成る。泪は恰も機械の油の如くに少量の脂肪と共に絶えず注がれて眼球前面の角膜の乾燥を防ぎ、濕潤と光澤を保つので、效用をなす睡眠から覺めた時誰でも自然と眼瞼をこする、之は眵の溜まつてるの

と、暗黒界から突然光明界の萬象を眺めるための一時的衝動にもよるけれども、睡眠中に涙液が溜渇してゐるのを刺戟して分泌を促すのが主である、蓋し睡眠中は凡ての分泌機能が減弱するが爲めである、涙、唾液、尿、屎、下痢等は減するけれども、反對に汗腺だけは盜汗、脱汗に見るやうに睡眠中は増進するものである。

涙は鹽類を夥しく含むを以て其味ひ鹹きは誰にも覺えのある事で多量に分泌した後、啼泣した後には眼瞼が紅く腫れるのは此の鹹のためである。涙は先づ涙點に集り、涙管―涙囊―鼻淚管に流れ―鼻腔内に流れ去るものなれど、分泌過量の際には眼瞼を溢れて頬を傳ふ。涙滴の大きさは時には極小の比較形容に用ひられ、或は甚しく誇大に林檎大、拳大、支那（支那）の張動は四斗樽大の涙を滾したといふ。科學的に觀察すれば單に一涙腺より流出る液體に過ぎざるも、一葉落ちて天下の秋を知るので、ホロリと落す一雫、哀情露れて、餘韻掬するに餘りあるものがある。

四、病的流涙 涸涙症と流涙症とある。涙管閉塞、三叉神經、顔面神經麻痺及び精神的障礙——悲み啼き盡くして涙の海の干し盡された極みが涸涙症である。流涙症は一、涙道の狭窄閉塞、輪匝筋麻痺、二、啼泣、三叉神經末梢部の刺戟による分泌増加、睫毛亂生、鼻病、鼻粘膜の刺戟、寒風、臭氣、煙襲、欠伸、噴嚏、咳嗽、嘔吐等の際に刺戟涙といひ反射的に中樞を刺戟して涙液を迸らしむ、獨逸軍は種々の新式武器を使つた中に、特種の藥品を裝填した彈力の爆發力を有する催涙彈といふ珍らしいものを用したこの彈丸が破裂すると附近にある兵士は眼に非常な痛みを感じて涙が止めどなく流れる如何なる藥品が使用されたかは分明せぬが、恐く唐辛子、玉葱、胡椒等が材料ならずやと想像されてをる。甚だ稀有なれと涙石の出る事あり俗に「舍利」といふ。鐵心慈腸、啼泣流涙は言ふまでもなく靈妙玄微の精神作用による高價なる一滴である。流れく、て渡るに難き涙川汲めとも涸れず涙の海、船を繋ぐべき渚だに有

るや無しや、風に漂ふ波のまに／＼浮き沈む人生の航路また難い哉。

五、涙と情 奈此無情風雨何、三春光景等閑過、平生濺盡憂時淚、也爲櫻花一半多(蘇峰)、人悲きに涙あり、口惜しきにあり、腹立しきにあり、嬉しきに亦涙あり、感時花濺淚、激情胸に漲り來るとき、其緊張の紐を解くものは涙である。怨涙、感涙、暗涙、溜涙、熱涙、慰藉涙、教訓涙、恩愛涙、忠孝涙……高山彦九郎の涙は鴨川の奔湍を激せしめた……溢情滲々、内的情緒は滂沱たる涙と化して迸り、燃ゆる情けの焔に傷める心を醫やし、三界の火宅を濕ほし、曠却の懺悔をも淨め、胸の嵐のあとの光風霽月の雅量を示すは、みなこの涙である。多情多感、縷々たる情の激動する處には必ず涙がある、冷えたる鐵にも打てば美妙の響あり、情の動かざる處にるなし、止めんと欲して止むる能はず、出さんと欲して出す能ざる處に涙の尊さがある。涙の源泉は情であり熱である。蠟燭の涙も氷る寒さかな……水の如く風寒き日にも涙のみは熱くして手を焦し胸を燃

く。情熱の水蒸氣は凝つて涙となる、水蒸氣の發する處必ず水あり、流水豈情勿らんや、わが涙その源の似るやらん行く川見れば泣かれぬるかな(晶子)。其傍りに平家の侍大將惡七兵衛景清が居つたといふ、涙川は熱田神宮の前にあつたと謠曲にある、涙の流るゝ處情其内に含まる、愛の結晶、至誠の滴露、熱情の迸りである、貞女おさんの心盡しの蜷川泣かしやんせ……其涙が落ちて流れて、小春が汲んで飲まうぞえ、吁涙は遺憾なく情を語る無聲の雄辯である。

六、涙の度 世に「涙脆き」[Tränenvoll]、「涙無し」[Tränenlos]とある、善意に解釋すれば「涙無し」は意志の鞏固なもの、「涙脆き」は理性に薄く感情に厚きを現す。若夫れ萬感胸に迫り情緒亂れて絲の如き時にも克く勘忍して涙管の口を塞ぎ得るもの之を男性的の態度とす、涙は分量を以て論すべきものではない、狐火の坊、吉例の人形振、百年千年泣き明かし、涙に此の身絶ゆればとて、餘りに執念深くて恐ろしくなる。泣かぬは泣

くに彌優さる、淋漓滂沱たるよりも幾百倍の苦がき涙を呑む時もある。「夏瘦せと答へて後は涙なり」一語萬言人知れず袖に包む時もある。ほしき涙の程度は眼にもつ涙、眼瞼に宿りて睫毛の露に濡るゝを男泣きの度とし、白露一滴ホロリとせるを慎みある女の度とす。露か時雨か急々切々、暖きとめかねて雨の如く泉の如く瀧の如きは涙器の亂用にして耻づべきの醜態である。「張りつめし心のゆるみわけもなく、唯さめく」と泣くこゝろよさ(白蓮)、涙徒らに零々、事に物に無暗に泣くは「泣き虫」とて涙腺水液の豊富といふ外に稱すべきの價値なきものである。夜雨蕭々降りみふらずみ五月雨の如く、雫となつて襟に濺ぎ、膝に玉散る霞の如く、漢文體に歎歎流涕或は和文體にヨヨと泣く。「綸言なれば嬉しくて、落つる涙の玉、樽むすびて肩に掛け、いざや、草紙を洗はんと、草紙を洗はせよとの敕宣を畏みて、小町が感喜の涙とめあへざるの状、髣髴たり。「嬉し涙」は歡喜驚喜の際に、「笑ひ泣き」は抱腹絶倒の際に、無念の

涙は悲憤慷慨の極み、憾みの涙は遺恨怨嗟の末に、不覺の涙は耐えにたえたる餘りに、過つて向脛を打ちし時は「半泣き半笑ひ」、追善に涙催す秋の暮「かたみこそ今はあだなれこれなくば……」追憶懷舊の涙もある。「冷える涙は夢をは破る……」夢裡尙ほ涙あり。涙に聲の曇りて聲涙共に下るといふ詞はあれど、仇浪立てる淺瀬よりは聲なき哀みの海は深きものぞかし、鳴く蟬より鳴かぬ螢が身を焦がすとの比もあつて、寂びやかに聲を潜ひそびて泣きてこそ趣はあれ、聲に咽ぶれる時は涙のこぼるゝ量の勢きを常とす、この極端なるは所謂「空涙」である、「空涙なればいしくも流れたり、いつはり人の頬のつめたさ」「あさましくいつはり人を見ならひて、空涙など流したまふや」「吉井、」

七、血の涙 「血の涙落ちてぞたきつ白河は、君が世までの名にこそありけり」「素性法師」。「くれなるのふりいてなく、涙には、袂のみこそいろまさりけれ」「貫之」。

空涙の反對を血涙といふ、紫恨紅涙といふ。數行紅涙兩所字、亦心より出づるのを「血涙を絞る」といひ、只の有合せの涙をば落す流す滾すといふ、絞るの文字が殊更ら深刻なる印象を與へる。「諸葛亮は涙を揮つて馬稜を斬つた」「この揮ふツ」のためは涙か男性的に活きる。「名馬は汗せず、汗せば其色赤し」といへど、時鳥ならぬ人の涙器より赤き血の流出すべき理なく、無色透明の涙液が赤色を呈するの筈もない。但し稀有ではあれどヒステリーの際に分泌上の病的異常が起りて、血色素を混へた涙や汗が感覺脱失を起した肢體又は眼から分泌されることがある昔は之を血涙又は血汗と稱へ、未開の地では更に神秘の意義を附帶せしめて騒いだ事もある。「エ、口惜や、恨めしや、妬ましや、思ひ知らずや此恨み、思ひ知せて思ひしれと、天地を睨む兩眼に、血の涙をはらく」とは謠曲「蟬丸」中の文句である。「血涙は「涙」のみにては解説し盡さざるほどの心痛の切なるものあるを訴へる詩味を帯びたる形容詞で

あらねばならぬ。卞和は璞玉を楚山に拾ひ、之を王に獻じたるにその玉である事を認められず、却つて罪を得て足を斬られた。彼はその玉を抱いて楚山の下に哭すること三日三夜、血の涙を流したといふ。人の己を知らざるを憂へず、人を知らざるを憂ふる也と孔子は云つた。韓退之は世に伯樂なしと嘯き、屈原は獨醒に瘦我慢を發揮した。聖人は流石に餘裕綽々として「涙なきものゝ如くである。

八、黒涙 笑には時として假偽の笑がある、人に往々心に笑はずして口に笑ふ。涙にも時として偽造の涙、假裝の涙、虚飾の涙なきにしもあらねど、こは賤しき者のする業にて黒き腹より出づるを以て「黒涙」といひ、墨痕を印する不純混濁の涙である。漱石氏著「行人」中に、女の涙に金剛石は殆んど無い大抵はギヤマン細工だと罵詈してある、味ひ蜜の如く甘き涙もある、蜜に針なしと雖も毒を含む事なしとせず、城を傾け、屋根を崩らすのは此の類ひの涙である。

「この君はまことの涙いつはりの涙とふたつ持てるをかしさ」(吉井)
然れども吾人の眼窩の裏に寶藏せる眞の涙腺より流出する涙は純粹、透明、淡泊、常に眞正であらねばならぬ、絶對に醇美であらねばならぬ。彼の露に照せる圓かなる月影は、人の心を隈なく映するの清き諺である。人を動かし世を動かす感涙は、至誠の流露にして、意に泣かぬ辨慶も一期の涙ぞ殊勝なる」とは生涯には一度の男泣きを以て安宅の關の虎口を脱れ得た情景の眞に迫るものあるを覺ゆ。

九、涙の價值 Reden ist Silber, Schweigen ist Gold und Thraenen ist Diamond.

雄辯は銀、寡黙は金、涙はダイヤ。

涙は女の唯一の武器であり、最後の武器である、かの泣く兒と地頭に勝たれぬ譬もある。涙は女の命である、露をいのちと涙をいのち、庭の朝顔窓の妹。女は涙の器である、紅涙欄干袖を絞るの涙は男子より女子のは豊富なるも、涙器の構造に差異あるが爲めではない、情と意との

強弱によりて流出分量に多少の差あるのみである、現在我子を他人の手にかけて殺されるのを目撃しつゝ忠義の爲めに涙一滴落さなかつた男優りの政岡もあつた。

非常なる場合には非常なる勘忍力を要す、男優りの一滴なきを賞すべきの時もあるべく、立波荒き大海の底にも人知らぬ眞珠の光あれば時には見えぬ木影にも情の露の宿する例もある、無神經的に曼々たる衷情を強て抑制するのを寧ろ木石に近しとて擯斥する場合もある、涙をバンと味つたものでなければ天國の事は分らない、泣くに泣くの價値あり、涙に涙の價値あるを知らねばならぬ。

十、涙に敵なし 柔克く剛を制す、君臣、父子、兄弟、朋友、夫婦、の涙は懦夫を起たしめ、身命を擲たしむるに足る、縦令眼前屍の山を積まんとも涙一滴こぼさぬ鬼にも比べん、武夫も、物の哀れには向はん、及はなしとぞ、戦と涙とは兩極端にして距離遠しと雖も、然も戦捷の功は往々涙の力

に因る、人を殺し、血を流す殺伐の語は武人の常習なれども、而も能く此殺伐の武人を動かすものは涙である。日露の役、海戦の勝因は東郷大將一滴の涙にあり、と信せられて居る、大將はワシントンの温良恭謙の名將であつて、項羽的暗啞叱涙の猛である、部下を萬死の戰場に派するや、御苦勞ですの唯一語に次ぐに、ホロリ一滴の暗涙を以てした。如何なる境遇、如何なる事情の下に於ても、戦へば必ず捷つ所以は一に此暗涙にあつた、仁者に敵なしといふ語あり、涙は仁心の自ら流露して結晶せるもの、即ち涙に敵なし、涙の勢力も亦偉大ならずや。

十一、涙と美 朗詠の聲顫へて、千壽の前の起て舞ふ時、小田卷の歌力なく、靜御前の水干の袖翻へる時、一滴の暗涙は如何に其美を添へしぞ。玉容寔寂涙闌干、梨花一枝春帶雨、涙は楊妃をして更に幾倍美ならしむ。虞美人草は虞美人の涙痕より生じたりといひ、洞庭湖上、君山の裏、斑竹の紫斑は娥皇女英の涙痕なりといひ傳ふ、涙紅にして千載の不巧に活

けるの美を語り芳句を傳ふ、涙は美の色彩であり、美の光輝である。

十二、涙と詩 涙も血も共に詩的である、而も血は男性的にして涙は女性的である、血の字は佛語の文典上男性に屬し、涙の字は佛、獨兩語とも女性である、詩歌は涙より成り、尊き人情の發露たる涙は即ち詩を語る。殊に「やまと歌」の如きは其著しきものである。詩より涙を除かば世界詩集の大半は滅滅せられん、情に成らざるの詩歌は、巧を弄し美を銜ふも誦するに堪へない。詩は有聲の涙であり、涙は無韻の詩である。

十三、涙は人の生命 試に涙を人より奪へ、乾燥無味、荒涼殺伐、殘忍險惡、社會は沙漠の如く殺風景に化し去らん、人は一片の肉塊となりて能く動く「ミイラ」と化し了らんのみ。サンドイッチ島にては涙は幸福を齎らすの徵號として喜ぶとかや、社會といふ大沙漠に於けるオーシスは涙である、實に涙は唯一のオーシスとなり、乾きたる肉も枯れたる骨も、之によりて活き、人も社會も之によつて活く、英雄も之によりて活く、

「涙は此身の命なりけり」とは武骨者の齋藤入道瀧口時頼の述懐である。涙によりて活くるもの豈獨り美人のみならんや、涙は人の生命である、社會の生命である、涙の涸れ果てたのは、やがて生命の斷絶した時である。あゝ涙！青春の輝きに眩めく人生の尊き花である。

家庭衛生終

大正九年十二月二十五日印刷
大正十年一月十一日發行

家庭衛生奧附

定價金貳圓

鈴置保長

著者

尼野敬二郎

東京市日本橋區上槇町八番地

發行者兼印刷者

株式會社警眼社

代表者

遠藤遠

東京市日本橋區上槇町八番地

印刷所

警眼社印刷部

不許
複製

10. 2. 4

117

終

